

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 17 日現在

機関番号：14401
 研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22730509
 研究課題名（和文） ナラティブ・アプローチによる高齢者の不随意的・協同構成的回想の探索的研究
 研究課題名（英文） Research on involuntary and collaborative reminiscing of elderly based on narrative approach
 研究代表者
 野村 晴夫 (NOMURA HARUO)
 大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授
 研究者番号：20361595

研究成果の概要（和文）：

高齢期において、生涯発達心理学的・臨床心理学的機能が想定される回想の不随意的・協同構成的性質について、回想を自伝的記憶についての「語り・物語（ナラティブ）」と捉えるナラティブ・アプローチによって探索した。その結果、不随意的回想の個人差、生起する機序が明らかとなった。また、夫婦間の協同構成的回想の類型やパターンが提起され、互いに回想内容の正当性を主張し、齟齬を調整する相互作用が見受けられた。

研究成果の概要（英文）：

Reminiscence have function from the viewpoint of life-span developmental psychology and clinical psychology. The present study explored involuntary and collaborative nature of reminiscence in elders based on narrative approach. Individual differences and mechanism of involuntary reminiscence were revealed. Type and pattern of collaborative reminiscence in married couple were suggested. These results imply nature and interactive mechanism of reminiscence in natural settings.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：生涯発達，ナラティブ，回想，高齢期，不随意的想起，協同想起

1. 研究開始当初の背景

過去を想起する行為である回想は、高齢期においては、人生行路の統合感をもたらす生涯発達心理学的機能が想定されるとともに、統合感を促進するための臨床心理学的介入として、高齢者施設等における回想法の普及をもたらしている（野村，2005）。しかし、以下に述べる通り、高齢者の回想の実態や、

その日常生活上に果たす機能は未解明であり、回想法を支える理論的・実証的基盤の脆弱さは、否めない。そこで本研究では、高齢者の回想を、自伝的記憶についての「語り、物語（ナラティブ）」と捉えるナラティブ・アプローチを採ることによって、高齢者の回想の実態と機能を探索した。回想の動的・即興的機能を捉え得るナラティブ・アプローチ

は、日常的回想に伴う不随意的・協同構成的性質に肉薄し、生態学的妥当性の高い知見を創出することが期待される。

高齢者の回想は、精神科医 Butler(1963)によって、その行為の普遍性と機能性が指摘されて以来、回想法において活用されてきた。回想法の効果の根拠は、回想という人生についての物語が、老年期の発達課題である自我の統合 (Erikson, Erikson, & Kivnick, 1986) を促進するという理論的想定に大きく依拠している。しかし、回想法における回想内容の分析や、回想頻度に関する質問紙調査は、回想の機能について、一定の結論をもたらしてはいない。さらには、それら臨床心理学的実践以前に、そもそも高齢者が日常的に行っていると思われる回想が、いかなる実態と機能を有するかを論ずる証左は、極めて乏しい。研究代表者は、こうした高齢者の回想機能の解明を目指し、回想を、自伝的記憶についての「語り、物語 (ナラティブ)」と捉えるナラティブ・アプローチを採用して、研究を行ってきた。具体的には、先行研究では相対的に軽視されてきた、回想の物語構造の分析方法を開発し(野村, 2005)、それと回想機能のひとつとされる自我同一性達成との関連を探った(野村, 2002)。これらの研究は、高齢者の回想が持つ自我同一性達成機能を、回想という語りの構造的性質から明らかにする可能性を示唆している。

2. 研究の目的

(1) 不随意的回想の探索

従来、高齢者の回想は、老いと生の有限性を自覚して生起する普遍的現象と考えられてきた (Butler, 1963)。しかし、日常生活上のいかなる局面で回想が生じ、どのように回想が展開して終息し、どのような生活上の影響をもたらすかは不明である。こうした日常的回想は、回想しようと思わずとも、不随意に生じる。高齢者の回想の実態と機能を論じる上では、この不随意性を考慮する必要がある。そこで、高齢者の日常生活における不随意的な回想の実態と機能を探索する。

(2) 協同構成的回想の探索

臨床的援助としての回想法と異なり、高齢者の日常的回想を語り、聴く者は、高齢者の身近にいる他者である。すなわち、高齢者の日常的回想は、配偶者や友人、施設内の同居者やスタッフと共にいる場で、不断に語り手と聞き手が交代する相互作用のなかで生起する。こうした日常的回想は、援助者や調査者が聞き手となる面接場面とは異なる様相と機能を持つ可能性があるだろう。高齢者の日常的回想が、日常的な他者と居合わせる場を媒介にして、どのように生じ、展開して終息し、どのような生活上の影響をもたらすか

は不明である。そこで、高齢者の日常生活における他者との協同構成的な回想の実態と機能を探索する。

3. 研究の方法

(1) 不随意的回想の探索

面接法と日誌法 (e. g., 神谷 (2003), Mace (2007)) を併用した。調査対象者は対人ボランティア経験者 24 名 (女性 16 名, 男性 8 名。平均年齢 60.4 歳) であり、調査期間は 2011 年 3 月から 12 月であった。個別面接法によって自己語りを促進・収集した後、日誌法によって不随意的回想を収集し、さらに事後面接によって日誌法の記録内容等を補足した。自己語りの面接では、ボランティア経験の内容や参加経緯、動機に加え、それらと関わる生活史を尋ねた。日誌法では、連続する 1 週間、不随意的な回想を毎日 3 個まで、携帯するカードに筆記してもらった。記録内容は、想起の状況 (日時, 場所, 行為, 契機, 気分) と想起した出来事 (時期, 内容) とした。

(2) 協同構成的回想の探索

一組の 60 代の高齢者夫婦に対して、集中的な夫婦間の協同回想を促すことで収集した。まず、夫婦双方にそれぞれライフライン (人生の経路を図示したもの) を作成してもらった。次に、夫のライフライン、妻のライフラインの順で、転機にあたる屈曲点についての説明を求めた後、配偶者にも必要に応じて説明を求めた。そして、互いの説明が契機となって生起した回想を述べてもらった。最後に、結婚や長子出生、退職などの標準的なライフイベントについて、協同で回想してもらった。

4. 研究成果

(1) 不随意的回想の頻度

60 歳以上の対象者、計 16 名による不随意的回想について、分析した。不随意的回想については、調査対象者の回想の平均総件数は 15.7 件であり、3~21 件にわたった。回想の総件数や回想した出来事の年代分布に基づき、調査対象者の回想を類型化した。出来事の年代分布の特徴は、調査対象者別に、総件数に占める各年代の件数の割合から捉えた。その結果、類型は、50 代、60 代の出来事が全体の回想の 50% 超を占める「近過去型」、10 代までの出来事が全体の 40% 超を占める「遠過去型」、回想の総件数が 10 件未満である「不活発型」、他のいずれにもあてはまらず、年代分布が分散している「離散型」であった (Table 1)。

Table1 不随意的回想の類型

類型名	分類基準	人数
近過去型	50代、60代の出来事が全体の50%超を占める。	6名
遠過去型	10代までの出来事が全体の40%超を占める。	4名
離散型	他のいずれにもあてはまらず、分散している。	3名
不活発型	回想の総件数が10件未満である。	3名

調査対象者別に、総件数に占める各年代の件数の割合（平均値）を、調査対象者全体、および上記類型の近過去型、遠過去型について Figure1 に示した。調査対象者全体では近年の出来事に次いで若年時の出来事の回想が多くを占める。しかし、類型別に見ると、近年の出来事を回想しやすい人と、若年時の出来事を回想しやすい人、まんべんなくさまざまな年代の出来事を回想する人など、調査対象者ごとに特徴的な傾向があった。

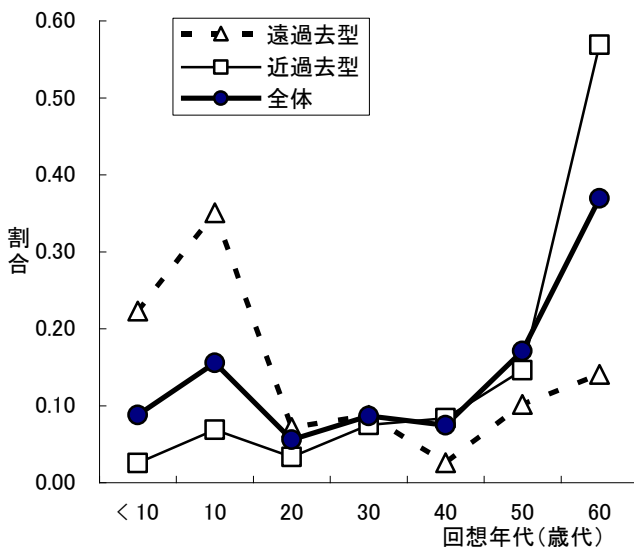


Figure1 回想した出来事の年代の割合

したがって、調査対象者全体では、従来知られている新近性効果とレミニセンス・パンプと同様の特徴が見られたと言える。しかし、これら回想した出来事の年代の特徴は、個人内の差のみならず、個人間や状況の差に由来する可能性が示唆された。ただし、日誌法と

いう課題要求の負荷や開示抵抗など、結果の解釈にあたっては、将来的課題を残している。

(2) 不随意的回想の機序

60歳以上だけではなく、50歳代の中高年期を含む全調査対象者の不随意的回想を分析した。不随意的回想が、どのような文脈によって引き起こされるのか、面接場面での自己語りとその後の不随意的回想との関連から探索した。少数例ではあるが、先行する面接場面が、後続する日誌に影響をもたらした可能性がうかがえた。それらの不随意的回想の日誌記録から、面接における自己語りと内容的に関連する想起内容を抽出した。自己語りと不随意的回想の関連性を、それぞれに含まれる出来事の内容と意味づけの点から以下の通り類型化した。

①自己語りの内容の反復的な回想

自己語りの内容が繰り返し回想される。
例：「話したことがグルグルと回って出てきた」

②自己語りの状況の反復的な回想

自己語りの状況における面接者や面接の場が繰り返し回想される。
例：「普段人には話していない事を話せたな」

③自己語りの内容を精緻化する回想

自己語りの内容が、情報を加えられたり、反証されたりして、精緻化されて回想される。
例：(子育ては母任せだったはずの)「父がいつも手をひいて(幼稚園に)連れて行ってくれた」

④自己語りの登場人物の新規な出来事の回想

自己語りの登場人物が関わった出来事が新たに回想される。
例：「主人(故人)と一緒に鮪の刺身を買に行き(後略)。声が聞きたい。返事してよ。」

⑤自己語りの再評価的な回想

自己語りの内容に対する意味づけが付加されたり、異なる意味づけがなされたりする。
例：「両親の人生は良かったのかな」

⑥自己語りの内容と同時期の出来事の回想

自己語りの内容とは異なるが、その内容が生起した時期と同時期の出来事が回想される。
例：「おじちゃんが切った(中略)特製の大きな積み木が宝物となっていた」

自己語りに想定されてきた経験の組織化や、人生の意味づけは、上述の自己語りの内容を反復的に回想し、精緻化し、再評価する類型のなかに見出されるだろう。自己語りの

機能性の一端は、「外なる語り」が、その後
に過去への覚醒を高め、「内なる語り」を賦
活する過程にあると考えられる。今後、各類
型の出現頻度やパターン、その個人差の詳細
な分析が求められる。

(3) 協同構成的回想の探索

夫婦間回想の録画映像から、協同構成的回
想の発生場面を抽出した。協同構成的場面
の特定に際しては、一方の回想に対する他方
の反応や、相互作用を基準とした。その結果
、下記の協同構成的回想の類型が抽出された。

①回想の補助

相手の回想の不確かな部分を補助したり、
情報を付加したりする。

例：夫「一年やったかなあ」

妻「一年」

②回想の承認

うなづく、相槌をうつなどして、相手の回
想をことばや身振りで承認する。

③回想の否定

相手の回想内容をことばや身振りで否定
したり、修正したりする。

例：妻「私もすぐにもう（勤務先を）出まし
たね」

夫「すぐじゃないよ」

④回想の譲歩

相手に回想内容を否定・修正された後、そ
れをことばや身振りで受け容れて認める。

例：夫「忙しいときはすでにおじいちゃん亡
くなってた」

妻「亡くなる前から忙しかった」

夫「亡くなる前から忙しかったな」

⑤回想の抗弁

相手に回想内容を否定・修正された後、や
はり当初回想内容の正しさを主張する。

例：妻「おじいちゃん病気した」

夫「病気してないだろう」

妻「おじいちゃんも入院した。知らない
の？」

⑥回想の連鎖

相手の回想から連鎖的に自分の新たな回
想が賦活される。

例：夫「(おばあさんが) 何やったっけ。糖
尿」

妻「透析、透析じゃない胆石」

夫「ああ、それで入院してたんや」

夫「思い出した、あの時僕だって洗濯物
干した覚えある」

以上の協同構成的回想の類型は、一連の回
想のなかで、以下のようなパターンを有して
いる。

協同構成的回想のパターンの一例

妻「子どもに助けてもらった。(夫には)
ぜんぜん助けてもらってません」

夫「助けてるわ」【否定】

妻「助けてもらってません」【抗弁】

夫「子ども助けたか」【譲歩】

妻「もちろん。病院の行き帰り。もう助け
てもらいました」【抗弁】

夫(ほーという顔)【譲歩】

家族間での協同構成的回想場面では、互い
の回想に触発されて自身の回想が活発化す
る可能性が示唆された。また、こうした回想
場面では、回想内容の正当性を互いに主張し
合い、齟齬を調整するプロセスが見受けられ
た。日常的な回想では、身近な他者との間で、
他者と共有した出来事についての回想が交
わされる。単独ではない協同的な回想は、不
断の相互交渉という動的なプロセスを辿っ
ている。

回想の持つ不随意的、協同構成的性質に焦
点を当てた本研究は、より生態学的妥当性の
高い回想の実態に迫り、回想が生起する機序
や動的プロセスの一端を明らかにしたと言
えよう。また、面接における回想が、その後
に日誌上で記録された単独での回想に与え
た影響からは、回想が連鎖的に回想を引き起
こし、それが自身のライフストーリーを改変
する可能性が示された。ナラティブ・アプ
ローチの観点からすれば、回想し語ることが、
新たな自己語りを生んでいた。回想は、内
的・外的なナラティブとして、心的な機能性
を有すると考えられる。

しかしながら、本研究の対象者数は、得ら
れた知見の一般化可能性を論ずるには必ず
しも十分とは言えない。本研究で得られた知
見や、試みられた方法を、さらに広範な対象
に広げて適用することが、将来の課題であろ
う。その際は、回想が回想を生む連鎖的性質
など、回想が生まれる文脈性に配慮すること
が望まれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に
は下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

①野村晴夫、心理療法のプロセス研究にお
けるナラティブ・アプローチの意義 — 研究
者の「私」の表し方、クライアントの視点へ
の近づき方. ナラティブとケア, 査読無, 4号,
10-16.

〔学会発表〕（計 8 件）

- ① NOMURA HARUO, Individual differences in involuntary memory recall among Japanese elders. 16th European Conference on Developmental Psychology, 2013. 9. 3, Lausanne, Switzerland.
- ② 野村晴夫, 人生の変化を考える：何によって、如何に、誰に訪れるのか, 日本発達心理学会第 24 回大会, 2013.3.17, 明治学院大学.
- ③ 野村晴夫, 高齢者はいつのことを思い返すのか：不随意的回想の日記に基づく類型別の検討, 日本発達心理学会第 24 回大会, 2013.3.15, 明治学院大学.
- ④ 野村晴夫, 中高年の自己語りが誘発する不随意的想起：外なる語りと内なる語り, 日本教育心理学会第 54 回総会, 2012.11.23, 琉球大学.
- ⑤ 野村晴夫, ナラティブアプローチの可能性：生活史をどのように聴くか, 日本心理臨床学会第 31 回大会, 2012.9.14, 中京大学.
- ⑥ 野村晴夫, ナラティブ・ベイスト・リサーチの可能性, 日本心理学会第 75 回大会, 2011.9.15, 日本大学.
- ⑦ 野村晴夫, ナラティブアプローチによる治療的意味生成過程の検討, 日本心理臨床学会第 30 回大会, 2011.9.2, 九州大学.
- ⑧ 野村晴夫, 現代発達心理学の行方を占う：社会・文化に生きる人間. 日本発達心理学会第 22 回総会. 2011.3.26, 東京学芸大学.

〔図書〕（計 4 件）

- ① 野村晴夫, 心理学事典(2013), 誠信書房, , ページ数未定.
- ② 野村晴夫, 発達心理学事典(2013), 丸善, 日本発達心理学会編, ページ数未定.
- ③ 野村晴夫, 発達科学ハンドブック第 5 巻 社会・文化に生きる人間(2012), 新曜社, 日本発達心理学会編, pp67-78.
- ④ 野村晴夫, 心理臨床学事典(2011), 丸善, 日本心理臨床学会編, 担当項目「ナラティブ・アプローチ」 pp668-669.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

野村 晴夫 (NOMURA HARUO)

大阪大学・大学院人間科学研究科・准教授

研究者番号：20361595